



遠藤周作文学全集 8 新潮社版

黄金の国

ナム河の日本人



黄^{おう}金^{こん}の国^{くに}・メナム河^{がわ}の日本^{にっぽん}人^{じん}

遠藤周作文学全集第八卷

定価一五〇〇円

印刷 昭和五十年十一月十五日
発行 昭和五十年十一月二十日

著 者 遠藤周作（えんどうしゅうさく）

発行者 佐藤亮一

発行所 株式 新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一
業務部 03（二六六）五一一一
電話 編集部 03（二六六）五四一一
振替 東京四一八〇八

印刷所 三晃印刷株式会社
製本所 新宿加藤製本株式会社

© Shusaku Endo, 1975. Printed in Japan.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

黄金の国	5
薔薇の館	121
メナム河の日本人	211
喜劇 新四谷怪談	297
解題	377

遠藤周作文學全集

第八卷

戲曲集

黄金の国

三幕九場

登場人物

井上筑後守いのうえ ちくごのりもり

平田主膳ひらた しゅぜん

加納源之介かの げんすけ

朝長作右衛門あさなが さくゑもん

雪

フェレイラ

嘉助

はつ

茂吉

久市

のろ作のろ せき

とめ

役人一

役人二

役人三

役人四

百姓一

百姓二

百姓三

百姓四

百姓五

子供たちの声

悪魔の囁ささやい声など

第一幕

第一場 へ島原の乱後、二年、長崎、宗門奉行、井上筑後守の奉行所へ

子供たちの歌が聞える。「提燈屋、バイバイバイ、石投げたもんな、手の腐る。提燈屋、バイバイ、石投げたもんな、手の腐る」

井上 盆の宵か。子供たちの歌う盆歌には、なにか哀しい響きがあるな。もうこの長崎に下ってから四月になる。

平田 (媚びるように) その四月の間、切支丹糾問の儀は見違えるほど捗り、長崎より大村、平戸に至るまで禁制の主旨行き渡りまして、あらかたの百姓、邪法を棄てましたのも、殿が来られてからでございます。この長崎奉行所でも捕えました南蛮伴天連二名、日本人イルマン五名、同宿七名、お悦び申しあげます。

井上 だが、まだ潜伏しておる南蛮伴天連もいる。……早う、すべてが片付かぬものか。疑う。捕える。捕える。転ばせる。切支丹は心の強さに己れを賭け、我等はその体を責める。人間は

体と心とのいずれが強いかを試す。いや、それよりも、余はもう人を疑うのに疲れた。お前、このような役目がふと嫌にならぬか。

平田 人を疑うのがわが役目と思うておりますからな。役人の私は他人をみれば疑って疑って疑いぬきます。それが相手のまことをあばく道すじでございますからな。

井上 まことをあばく道すじか。一方、切支丹たちは、まず人を信ぜよと申しておる。それが人のまことをつかむ道だと。

平田 だが、殿、たとえばこの奉行所に、切支丹がひそみおるといたします。表は我々同様、お役目一途に勤め励み、かげではかくれおります伴天連や信徒百姓をひそかに助けるといたしますれば……。人間は表ではとても信じられませぬな。まことを嗅ぎつけるのは、私のような人間でございましょうな。

井上 なるほど。お前にかかつては、同僚、身内まで疑心の種か。余も蒲生家の臣であつた時、一度は切支丹の教えを信じたことがあつたぞ。とすると、この余も、お前、疑うことがあるか。まあよい。(きびしい口調で) 今、お前、この奉行所に……切支丹がおると申したな。

平田 とは申しませぬ。たとえば、と……こう申しあげたまででございます。

井上 たとえば、か。狡い奴だな、お前は。そのように奥歯にもののはさまった言い方をするのは……その切支丹、よほど、余にそば近く仕える者と見えるな。

平田 それは主膳の口からは申せませぬ。殿の御賢察にお委^{まか}せいたします。

井上、考えこみながら、茶を飲んでいる。砂時計の音なる。子供の歌きこえる。

井上 (顔をあげて) しかと、証拠でもあるのか。

平田 たとえば……。

井上、首をふって平田を制す。加納源之介登場。

源之介 殿。大村家御家老、大村家忠様、殿にお目通り致したき由、ただ今、お出ででございます。

井上 よしよし。書院の方にお通し申せ。

源之介 かしこま 畏りました。

井上 源之介、一寸待て。

源之介 お呼びにございますか。

井上 お前は幾つであつたかな。

源之介 二十歳にございます。

井上 嫁はまだとらぬのか。

源之介 まだお役目一途に考えておりますゆえ。

井上 いや、お役目を大事におもうならば、早うよき嫁をとることだ。平田、そうではないか。

平田 仰せの通り。

井上 もうよい、源之介。

源之介退場。

井上 主膳、話はあとで聴こう。されど、かりそめにもこの奉行所の役人に切支丹がおるとなれば、これは、ただにてはすまぬ。

平田　されば、私も殿のほか、もとより他言いたしておりませぬ。御指図にしたがい、江戸に伝
わらぬうちに、ひそかに……。

井上、下手に退場。平田、あたりを見廻し合図をする。警吏、姿をあらわす。

平田　おい、あの女は来ておるか。とめとか申す女だ。

警吏　既に、あちらに参っておりませぬ。

平田　よし。俺が合図をしたら、その女をここにつれて参れ。合図をしたらだぞ。

警吏退場。

源之介、さきほど井上筑後守が飲んだ茶道具を片付けに部屋に入ってくる。平田をみて挨拶す
る。

平田　二十歳か。

源之介　は？

平田　二十歳か。美しい歳だ。

源之介　さようでございますか。

平田　俺も二十歳という年齢があった。お前と同じようにまだ奉行所に入ったばかり、人を信ず
ることを知っていた。だがさきほど殿に申し上げたように、人間を疑い、糾問してこの十五
年の歲月、役目の垢かはいつか、さがとなり、習いは性となりこのような人間ができあがった。

源之介、お前もやがて、俺と同じようになるぞ。（笑う）

源之介　私は、そのようになりたくはありません。

平田 若いうちは誰でもそう考える。だが、そうはいかぬ。そうは、どうしてもいかぬ。(間をおいて)ところでお前、さきほど殿から嫁女をもらえとやさしいお言葉頂いたな。

源之介 有難いことと思っております。

平田 (皮肉に) 殿は……若い者にも……よう心を配られるわ。

源之介 それはもう、身にしてみて。

平田 ところで、お前、どういう嫁を所望じゃ。

源之介 は？

平田 どういう嫁を所望かと聞いておるのだ。ええ、恥ずかしゅうて言えぬか。

源之介 まだ……考えたことはございませぬ。

平田 うそを言え。二十歳の年で、自分がどのような娘を嫁にするかと日夜、心に想い描かぬ男はおらぬわ。

源之介 私は、さような、男ではございませぬ。

平田 そうかな、それならば、眼をつぶってみる。俺たちがこう話をしている時も……お前と生涯つれそう娘は、今、どこかに生きておるのだぞ。この国の……いや、ひょっとすると、この長崎で。

源之介 おからかい下しますな。

平田 いや、からかつてはおらぬ。俺もな、二十歳の時、そのようなことばかり考えていたものだ。お前の心には見えぬか。お前の嫁になるその娘が。俺には今、その娘が何をしておるか、わかっておる。

源之介 (ひきこまれて) 何を、しておりますか。

平田 ただいま厠かわやにて用足し中である……いやいや許せ。この口がいかなぬ。(手で口を叩く) 俺のような年齢になると美しいものをちと汚したくなる癖ができる。いやな男だ、この俺は。そう思わぬか。(笑う) ところで、お前、真実、どのような嫁がほしい。

源之介 私は母一人、子一人でございますゆえ、母に孝行してくれるようなやさしき嫁をもらいとうございます。

平田 当り障りのない返事をするわ、こいつ。その言い方がお前の処世術か、すると心さえやさしければ、顔の美醜は問わぬと言うのだな。

源之介 (小声で何か呟く)

平田 え、よく聞きとれぬぞ。

源之介 それは……見めもうるわしければ……なお、結構でございます。

平田 ほれ、見ろ、ならばそうと早く申せばよいのに。ところでお前、大村家の家老が何ゆえ、今日まいったか、知っておるか。

源之介 存じませぬ。平田さまは、御存知でございますか。

平田 知らないでどうする。この眼は奉行所のことなら何事でも見透みとおせる眼だ。この鼻はどんな人間のかくしごと嗅ぎわけける鼻だ。でなくては狡猾こじやうな切支丹どもを糾問することはできぬわ。お前はさきほどから殊勝ぶったことばかり申しておるが、心のなかで何を思っているか、それぐらい、俺には手にとるようにわかるのだ。

源之介 他人に知られて恥ずかしいかくしごとなど私にはございませぬ。

平田 そうかな。(平田、源之介を嗅いで) 匂うぞ、匂うぞ。

源之介 御戯れがすぎます、平田さま。

平田（自分に言いさせるように）なあ、俺が今、嗅いでいるのは俺が喪^{うしな}った匂いだ。この俺だってな、昔、お前のように若かった時には憧^{もが}れというものを遠い向うに置いて、それにどうにもならぬ思いを持ったことがあるぞ。長崎、丸山の街を真白にきよめた雪のなかを、傘もささず、ただ歩きまわった冬の朝。惚^ほれた女の名を思案橋の上で幾度も呟いた秋の黄昏^{たふがれ}。その女の名はお前が今、心に思っている娘と同じ雪と言うたわ。どうした、この名を聞いた途端、お前の顔は、ほれ、紅葉^{もみぢ}のように。（源之介逃げるように退場）

朝長作右衛門、上手より現われる。

朝長 平田殿、お役目御苦勞に存ずる。

平田（とぼけて）これは朝長さま、たった今、あの源之介にたわいもない昔話をきかせておりました。昔、奉行所にはじめて勤めました頃の話で……昔話を若い者に聞かせるようになっては、やはり年でございますな。（笑って）この主膳ももう若くはございませぬ。

朝長 なにを、平田殿はまだまだお若い。拙者こそ老けたと申すもの。お役目もそろそろ辛うござる。この所、平戸のオランダ人とエゲレス商人たちの争いで、彼の地^かに赴いておりました。双方ともそれぞれの言い分があることゆえ、一応、殿の御裁断を仰がねばと。

平田 なるほど、ポルトガル、エスパニヤ、あるいはエゲレス、オランダなど南蛮^{はまぐり}北狄^{きたてき}の国々よりこの地の果てに、黄金の国を求め、幻の夢を抱き、波濤^{はとう}万里、我が国に船を送ってまいります。してみるとちょうど我が日本国は幾人も女に懸想された男とよく似ておりますな。考えようによっては日本とは男冥利^{みょうり}につきた果報者でございます。エスパニヤと申す女に思いをかけられ、ポルトガルとよぶ女にも袖引かれ、それにオランダ、エゲレスにもそれぞれ、眼くば

せなどをされ……。

朝長 これはこれは、平田殿らしいとえだ。だがその女たちの中から、どれか妻を選ぼうというのが日本だが……平田殿ならばどれを妻になされる。

この話の途中、井上筑後守、下手より姿をみせ、じっと朝長作右衛門を観察している。

平田（井上に気づくが知らん顔をして）はて、切支丹信徒ならば一夫一妻を固く守るゆえ、朝長さまの仰せの通り、ただ一人の妻を選ばねばなりません。私はもとより切支丹ではござらぬ、どれも選ぼうとは思いません。

朝長 はて？ どれも選ばぬとは？

平田 どれにも、情けをかけてやります。

朝長（笑いながら）いやいや、平田殿、いやしくも人の道を守る者ならば、幾人もの女に同時に情けをかけることはできません。

平田（皮肉に）これはこれは。お固い。人の道？でございますか。御存知でもありませんが、九州の諸大名がその昔、ポルトガルやエスパニヤとの通商をば願いながら、切支丹に踏み切らなかったのは、昔、伴天連から、一人の正室以外女をもつことを許さぬと言われしためと聞いております。その時のパードレの言いようは、さぞかし今の朝長さまと、そっくりでありましたろう。

井上 平田、平田。朝長作右衛門はお前などとは違うて、妻に死に別れたのちも後ぞいをもらわず今日まで操をたてたまことの武士だ。作右衛門、平戸での役目、大儀であったな。